広報市民リポーターだより No.1

に飛び込んできました。右手奥の築山から延びている二抱えもある松が、一本の支えも無しに自力で傾斜を保っています。

「この位置から見るとお庭が良く見えますよ」という若奥様の声に、広縁に座って、雨に濡れたお庭をじっくり拝見しました。濡れて白さが際立つ石、木々の濃淡の緑、黒く湿った土の色やコケの色など、あいにくの雨と思っていましたが、お庭の静寂と古雅の趣を一層引き立て、絶好の景色となりました。

長い高橋家の歴史の中で、このお座敷を訪れたたくさんの文人墨客のお話などをご当主の禎一氏と奥様からしていただきました。大町桂月、内藤湖南、菅江真澄など、秋田県ゆかりの学者や文化人がこ

五稜池のみごとな鞍馬石

こを訪れ、当時のご当主たちと交流した様子が伺われました。

床の間の、桂月の書の文面からも親しく交流があったことを感じさせ、また若かりし頃の内藤湖南に書の指導をした当主もいたとのこと、三代続いて書家が出ているなどということからも、当時の第一級の文化人のサロンであったことが伺えました。

正面の枯れ山水のお庭は、浄応寺（中の寺）がお庭を作るため京都から造園師を呼んだ際に、一緒に造らせたとのことですが、裏側に当たる「中坪」と呼ばれるお庭も石組の立派なものでした。こちらは元々のお庭に禎一氏が少しずつ手を掛け丹精込めて造られたとのことでした。

この「中坪」に見事な大木があ

枯山水の高橋家庭園

り、満開の花を付けていました。この樹木の名前は「沙羅双樹」といって、ツバキ科の「ナツツバキ」であるとのことでした。インド北部原産のフタバガキ科の「沙羅双樹」とは別種で、日本で言う「沙羅双樹」はこの「ナツツバキ」を指すとものの本にありました。

名前のとおり根は1つ、幹は2本からなる不思議な木に今回初めて対面し、地面に散り敷く大量の白い花と、堂々たる姿形ながら優しい風情のある巨木に感嘆しました。平家物語の冒頭の部分「祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり　沙羅双樹の花の色　盛者必衰の理をあらわす」を頭に浮かべ、恐らく日本人である平家物語の作者の脳裏には、一日にして散るというこのナツツバキの白い花の

「ナツツバキ」の根の部分

姿があったのだろうと、今頃古典の勉強をした思いで感無量でした。

ご一家の皆様の和やかな様子と温かいお話ぶり、おもてなしなどにこちらの心も温まり、深謝しながら高橋邸を辞去しました。

訪問を終えて

今回の名園探訪ではいろいろなかたにお会いし、すばらしいお庭を拝見することができました。今後も秋田県や大館市の、残された希少な文化財に目を注ぎ、自分なりの知識を増やしていきたいと思いました。

それぞれの場所で温かく迎えていただき、多忙な中にもかかわらず丁寧にご説明くださいました方々に、心より感謝申し上げ、レポートを終えたいと思います。

「ナツツバキ」の白い花